

吉本ばなな

『N・P』論

岡崎仁美

目次

はじめに

第一章 吉本ばななの小説の変移

第一節 『キッチン』の構成

第二節 『哀しい予感』の構成

第三節 『キッチン』から『N・P』までの構成の変化

第二章 『N・P』の特徴及び『N・P』に見る結論

第一節 萃の持つ「人魚」のイメージについて

第二節 萃と風美二人の女性の視点について

第三節 小説の中の小説について

おわりに

はじめに

一時のような「ばななブーム」が去った今でも、吉本ばななの作品が好きな人は多い。私もその中の一人だ。何故吉本ばななの小説は若い女の子たちにこれほどうけるのだろうか。文章表現が易しい、言葉が短い、変わった女の子が出てきておもしろい等、理由は

様々だろう。けれどもそんな表面上の理由だけでなく、作品中に書かれている物事に対する価値観に共感を覚えているからではないかと思う。そこで、彼女のデビュー頃の作品からごく最近の作品までをいくつか具体的に見ていきながら、その中を通して流れている視点を研究し、私なりに彼女の作品の魅力が何かを探っていきたい。

第一章 吉本ばななの小説の変移

第一節 『キッチン』の構成

吉本ばななの作品にはいくつかの特徴、ストーリーのパターンがあるが、それらは作を重ねるにしたがって少しずつ変化している。その変移を追い、主軸となる一貫したテーマと変化している部分とのつながりを見ていきながら、『N・P』でどう展開されているのかを考えたい。

問題をより具体的にするために、ここでは初期、中期の『キッチン』（『満月キッチン2』を含む）及び『哀しい予感』を比較対象としてとりあげる。

最後の家族だった祖母を亡くしたみかげは、妙な縁から雄一という青年の母兼父であるえり子の住むアパートに居候し始め、三人の奇妙な共同生活が始まる。彼ら親子に強い魅力を感じ家族的な愛情を持つみかげだったが、えり子の突然の死を経て雄一とみかげの関係は微妙に変わっていく。

この作品では、主人公のみかげの視点からみかげ自身の物語が展開する。みかげと雄一、えり子との心の交流の場として台所が常に使われ、食べ物や言葉の代わりとなってお互いの気持ちの表現に使われるのが特色の一つである。

「カツ井の出前にきたの。」私は言った。

「わかる？　ひとりで食べたらずるいくらい、おいしいカツ井だったの。」

△中略▽

「うん、おいしそうだね。」

と言って雄一はふたをあけ、さっきおじさんがいていねいにつめてくれたカツ井を食べはじめた。

それを見たとたん、私の気持ちは軽くなった。

やるだけのことはやった、という気がした。

みかげが、今までの兄妹のような関係から雄一への恋を自覚し、自分の気持ちを確かめるためにとった行動だが、言葉での愛情表現よりもインパクトが強くストレートだ。

いつか雄一が言った。

「どうして君とものを食うと、こんなにおいしいのかな。」

私は笑って、

「食欲と性欲が同時に満たされるからじゃない？」

と言った。

「ちがう、ちがう、ちがう。」

大笑いしながら雄一が言った。

「きつと、家族だからだよ。」

ここに食と恋愛との関係が的確に表現されみかげのカツ井の行動と関連づけられている。

えり子との会話も台所におけるものが多い。

——真冬だったのよ。

えり子さんは言った

みかげ、その時、あたしまだ男だったわ。

△中略▽

せっかくだから、今、肉まん食べましようか、とレンジにかけてジャスミン茶を入れていたら、ふいにえり子さんがそれを語りはじめたのだ。

えり子が、死んだ妻との最後の思い出をみかげに話し始める場面である。これはえり子が男から女になることを決意するきっかけとなった事件であり、人生の転機となった出来事である。それをみかげに語るというのは、単に仲の良い他人ではない、家族愛と呼べる

ものをえり子がみかげに抱いているからだといえる。

『キッチン』はえり子の死があるとはいふものの、全体を通して明るい未来の開けている作品である。『キッチン』の中でみかげと雄一とえり子は家族だが、みかげは二人にとって赤の他人であることがはっきりしているため、みかげと雄一の恋は禁断の恋ではないし、二人の後ろめたさはない。ただえり子の死による喪失感が大きく、家族愛だったのか恋愛だったのかということでも混乱しているだけののだ。

この作品には、家族愛と恋愛との混合、二人の女性（実は男性）が登場すること、食と愛情との絡みといった吉本ばななの作品に通して流れるテーマの初期の形が見られる。

第二節 『哀しい予感』の構成

弥生は、優しい両親と気の合う弟哲生がいる家庭の中で幸福に暮らしていたが、一族の中でも変り者のお婆、ゆきのに家族よりも強い絆を感じていた。彼女が真実の血族なのではないかと思つた弥生は、家出をしてお婆の家に行く。そこで自分の勤が正しかったことを知り、弟であつた哲生に恋愛感情を認め始めた矢先にゆきのが行方不明になってしまう。弥生は自分を連れ戻しにきた哲生とゆきのの行方を追ううちに、それまでのゆきのの寂しさを理解し、自分がどちらの家族といるべきかを考えていく。

この作品は、弥生の視点で弥生を主人公に描かれているが、ゆきのの物語にもほぼ同じ比重で焦点をあてている。というよりも、弥生とゆきのという二人の女性の関係を軸にそれぞれの恋愛が絡んだ

物語である。

ゆきのは世間では変つた女性として見られ、自分の意志で社会から孤立して暮らしていた。二人は実は姉妹だったが、ゆきのは両親の死から立ち直れず、その死を引きずつて、弥生と暮らすことを望みながらも心を外へ開けないでいる。

弥生はゆきのの心を理解し共感を覚えているが、弥生にとつてゆきのは過去の記憶の中の姉であり、弥生は今現在の社会、家族の中で、現実の感情を過去の思い出よりも強く持っている。

「そのつもりだった。私は、あの家の中でずっと閉じたまま死んでゆくことを幸福と思つていた。でも、今はもう違う。」

△中略▽

「旅だったね。」お婆は言った。「私は、もう大丈夫。だから弥生、もう、お家へおかえり。」

そうだ、これからは別々のところで、それでも姉と妹として生きていくのだと私は思った。

これはラストシーンの二人の会話である。ゆきのは現実の生活を営む妹弥生によつて、過去の家族の思い出にすがり家の中にもつて一人きりの生活を送るという非現実的な世界に訣別をし、年下の恋人と新しい生活を始めようと前進し始めた。

けれども弥生の方は、過去の記憶を取り戻したことで姉を救うことはできたが、そのためにそれまで姉弟だつた哲生との関係が恋愛関係に変化してしまい、現在の家庭の中に問題を作つてしまった。ただ、弥生と哲生は実際には血のつながりがないために、二人の間

に罪悪感はほとんど見られず、社会的にも絶対のタブーというわけではない。

『キッチン』に比べて『哀しい予感』は登場人物を多少増やし、家族問題、恋愛問題共に複雑になっている。二人の女性の視点がはっきり現れたのもこの作品あたりからである。

食については『キッチン』ほど強調されて作品の前面には出ていないが、恋愛・家族愛との結びつきは強い。

食事中、ずっと黙っていた。テーブルクロスにひじをついて、哲生も考えごとをしているように見えた。私はフランスパンをととも細かく手でちぎり、ゆっくりと食べた。食事が終わらなければいいのに、と思った。

弥生と哲生が男女として初めて食を共にする場面だ。「フランスパンをととも細かく手でちぎり、ゆっくり食べた。」という動作などは、そのまま弥生の気持ちを表している。言葉での愛情表現はともすれば軽くなりがちだが、共食をするという行為はある重みを持って言葉以上に二人の間に流れる感情を伝えている。弥生とゆきの関係がはっきりするのも食事の場面である。

「とにかく、飲んでみようか。」

とおぼは言った。つまみがないので、プリンに残りと、冷蔵庫に入っていたアメリカン・チェリーでウイスキーを飲むことにした。

〈中略〉

私は静かにたずねた。

「私達のお父さんとお母さんは、どんな人達だったの？」

これを聞かないと、たとえ戸籍抄本を取り寄せても、そこに真実の写しを見ても、家には帰れないと私は思っていた。

おぼはすらりと口にした。一瞬にして、隠すことをいさぎよくあきらめてしまったようだった。

「優しい人達だったよ。」

この時やっとな弥生は自分のさがしていた家族を見つけ、ゆきのは妹を姪と偽る必要がなくなった。そしてお互いが、黙っていても心の通じる相手を本物の姿で受け入れることができたのである。

第三節 『キッチン』から『N・P』までの構成の変化

以上二作と『N・P』を通して見ていくと、大きくテーマとしても取り上げられていることに気づく。これらのテーマが三作でどのように変化しているか、またはしていないかを考えたい。

食については、『キッチン』では言葉を交わすだけでなく、一緒に食事をすることで人と人とがコミュニケーションをとり、心を通じ合わせていた。家族的愛情でみかげと雄一とえり子が結ばれていたのも、台所のコミュニケーション、つまり食事を共にすることによってであった。さらに雄一とみかげがお互いの気持ちを家族愛から恋愛へと変化させる時にも、「カツ丼」という食物が使われていた。

そういう意味からいうと『キッチン』においては食が家族又は男女の愛情に強く関連し、食を主軸に物語が進んでいるといえる。

『哀しい予感』では食事の場面はそれほど多くは出てこないが、弥生とゆきのが初めて姉妹としての会話をやる場面、弥生と哲生が姉弟の枠を越えて恋愛感情を認める場面では、食事が伴っていた。『キッチン』ほど前面に表されていないだけで、テーマとしては同質のものを含んでいるといえるだろう。

これらの場面は何を意味するのか。食事を共にすることで二人の密度を濃くする、又は関係を深める道具として食が用いられているのではない。食そのものに意味があるのだ。

大島渚他の対談『食べる』の中に

ドフトエフスキーの小説の中には、セックスそのものの場面が出てこない。それと同時にめしを食う場面も出てこない。やはり食うということとセックスは、ものすごくつながっているところがあるんじゃないかな。

ということが指摘してある。吉本ばななの小説も食についてドフトエフスキーの小説の食と同質のものを描いていてのではないか。つまり、『キッチン』『哀しい予感』でみかげと雄一、弥生と哲生の間に性的つながりそのものを書かないかわりに、食を共にする場面を書くことで性的な意味を持たせているのだ。

では、みかげとえりこ、弥生とゆきのの間での共食には何の意味があるのか。この点については

人間というのは家族というものを作るために共食したのだ。

(前掲書『食べる』)

という論を引用しておきたい。みかげがえり子を求める気持ちも、

弥生とゆきのが求め合う関係も、家族というつながりではないか。吉本ばななは、食を性と家族の二方面に関係づけて描いているのである。

『N・P』になるとこの食事の場面はさらに少なくなる。そしてここでは恋愛関係にある幸と乙彦、風美と庄司が二人で食事をする場面は一度もない。その代わりに、恋人である二人の間に遠回しの性関係の描写がある。

目覚ましを止めて横を見たら、庄司が青ざめた、生気のない顔で眠っていた。

「失礼なこと聞いていい?」

「いいよ。」

乙彦が言った。

「肉親と寝るのって、どういう感じ?」

咲は真顔できき、私は思わず笑った。

けれども食のテーマが全く消えたわけではなく、食と家族、食と恋愛の関係は少し形をかえて『N・P』でも書かれている。

おいしかった。私はパンにバターをたくさんぬって、全部たいらげた。萃はそのあいだビールをちびちびと飲みながら小さな背中テレビを見ていた。何かいやな感じがつきまとっていった。部屋が静かすぎる。夕方が長すぎる。テレビの音が寒いほどよく響く。少しずつれていた。気持ちと、時間の流れと、現

実の空間。初めてあったときに比べて萃が小さすぎる。
まさか本当に毒が入っていると、誰が思うだろうか。

自殺を思いながらも迷いを断ち切れない萃が、混乱する気持ちのまま風美を呼び、毒入りの料理を食べさせてしまふ場面である。死を思いながら風美に助けてほしい萃の孤独感が、毒入りの食事という歪んだ形で表現されていて、前二作の心暖まる、家族のつながりを確認するような食事とは違っている。

「君が好きなのかな。」

「よして。」

「秋になったら考えよう。」

「そうして。」

私は言った。

「そうしましょう。」

乙彦を見た。

この会話は萃が二人の前から去ってしばらくしてから、二人でキッチンしながら食事をする場面で交わされるものだ。これから先二人の関係を暗示しているようだが、この二人の関係も今までの小説の中には描かれていないパターンである。これは吉本ばななの小説を書くことにおける観点の変化の一つとらえてよいだろう。

恋愛については、どの作品にも近親者との恋愛が描かれていることが一つの特徴で、後期の作品になる程二人の間柄が複雑になっている。具体的にあげていくと『キッチン』はみかげが雄一への思い

を家族愛から恋愛へと変化させつつある段階で、自分の気持ちの自覚で終っている。『哀しい予感』では弥生が弟だと思っていた哲生が実は全くの他人だとわかり、二人の間が姉弟から恋人へ変わるが、一緒に育ったことにおいて二人は姉弟であり、両親に対しての問題などは未解決のままだ。それが『N・P』になると、萃は父、さらには腹違いの弟と恋愛をし、弟の子供まで身籠ってしまふが、恋愛の中から自分で一つの解決をして暗い恋から抜け出すまでが書かれている。通してみると、一連の作品が恋愛の始まりから終わりまでを描いていることに気付く。また、もうひとつの特徴は、一人の女性が語る物語の中心にもう一人の女性がおかれているという点である。この形式は初期の作品からはっきりとられていたわけではなく、『キッチン』では私小説的な書き方で自分の物語を語っているみかげに、おかまであるえり子がみかげの心を安らげる人物として設定されていて、あくまで脇役である。それが『哀しい予感』あたりから、弥生を通してゆきのという女性を描くというパターンができあがる。この作品の中で、ゆきのはただの脇役ではなく物語の流れは彼女の行動によって進行していて、むしろ作品の中で要となる役どころだ。さらに『N・P』になると、語り手である風美が萃の物語を語っている。物語は萃を中心として動き、風美はその物語を一步離れたところから眺めている。『キッチン』から見ると二人の女性の視点は逆転しているように見えるが、そうではなく、風美の物語も萃の物語と重ねて進行しているので、『N・P』になってはつきりとした二つの視点が得られているといえるのである。

語られる側の女性の特質として容姿、性質共に特異であるという点があげられる。

「はじめまして。」と笑った。「雄一の母です。えり子と申しませう。」

これが母?という驚き以上に私は目が離せなかった。肩までのさらさらの髪、切れ長の瞳の深い輝き、形のよい唇、すっと高い鼻すじ、——そして、その全体からかもし出される生命力のゆれみたいな鮮やかな光——人間じゃないみたいだった。こんな人見たことない。

〔キッチン〕より)

彼女の発する空ろで、しかし明るい光はまわりの空間を満たしていた。長いまつ毛をふせて眠そうに目をこする様は天使のようにまばゆく見えたし、床に投げ出された細い足首は彫像のようにつるりと整っていた。その何となく汚ない古い家中が、おぼの動きにあわせて満ちたりひいたりしているように感じられた。

〔哀しい予感〕より)

わかってもらえるだろうか。私は恐怖を感じた。こんなふう
に大人の顔に生まれたての赤ん坊の瞳がついていたら、そこには何が映り、どんな考えが浮かぶのだろうか、と思った。

変な人、見たこともない外見をしている人。特別美人でもない、すごくかわいいわけでもない。でも、魅力があった。けもの
の勘のひらめきみたいなもの、知性のおおもとの魂みたいな
もの。

〔N・Pより〕

これらはえり子、ゆきの、萃のそれぞれの容姿を表す部分だ。こ
の中にあるように彼女達は、「生命力のゆれみたいな鮮やかな光」
や「空ろで、しかし明るい光」や「けもの勘のひらめきみたいな
もの」といった内側から出る外見の魅力を持っている。彼女達の持
つ美はその性質と別のものではなく、えり子はおかまになり夜の仕
事をして雄一を育てた故に、ゆきのは自らを社会から隔離して独り
きりの生活を営む故に、萃は実の弟との恋愛に決着をつけられない
でいる故に、そして彼女達は、男だった頃愛した妻や両親との生活
や父親の残した小説といった過去ものを引きずって生きている故
に、彼女達が持ち得る特別のものである。彼女達のモラルはその性
質のために社会の常識からずれていて、自らの強い意志で生きなが
らも理解されない孤独感を同時に合わせ持っている。この孤独感を
埋め合わせる役割を持つのが、恋人ではなく語る側の女性である点
が特徴だ。これまでも山田詠美や林真理子が、それぞれの著作で
ある『放課後の音符』『葡萄が目にしみる』等で二人の女性を題材
にして小説を書いているが、それらの小説の中の二人の女性の間には、
憧れや共感と共に反感、反発の感情があった。しかし、吉本ば
ななの書く二人の女性の間には、友情とか他人同士の交流の域を越
えた、より深い理解が存在している。その点において今までとは違
う女性の視点の描かれ方があるといえる。

第二章 『N・P』の特徴及び『N・P』に見る結論

第一節 萃の持つ「人魚」のイメージについて

第一章では、吉本ばなの初期作品『キッチン』中期作品『哀しい予感』と『N・P』を比較し、内容・形式の変移をたどった。その結果、三作のうちやはり『N・P』にそれまでの吉本ばなの書きたかった小説のテーマが集約されているようだ。第二章では、この『N・P』について第一章で提示したテーマを掘り下げていく。

風美の恋人だった庄司は、「N・P」という小説の98話目を翻訳中にこの小説に引き込まれるようにして自殺してしまつた。それから五年後、風美は「N・P」の著者の遺児で双子の姉弟咲と乙彦に再会し、さらに彼らの腹違いの姉萃が「N・P」98話目のモデルで、現在乙彦の恋人だといつて現れる。風美は、強烈な個性の持ち主である萃に惹かれながらも、彼女の頹廢的な生き方に死の影を感じ、やはり萃も「N・P」に引きずられていることを知る。

『N・P』では『キッチン』『哀しい予感』のえり子やゆきのよりも、さらに萃は変わった性質を持つ女性として描かれている。

眠いと言つて彼女が先に帰つた後で、彼は言つた。『恐いのとつきあつてるな、ああいうの、昔よく、海にいたんだ、気が抜けてたり、ミスをおかしそうになつたり、気弱になつてるとき、よく海底に誘われた。若い頃にしか見えなかつた。若い頃、や

ばい女はみんなあれに似た目をしていて、目的が自分でもわからない魔物の目だ。海で見た気がしたのと同じ』って。ああやっぱり、と思つた。

乙彦が風美に彼の友人が萃について言つたことを話す場面である。ここに出てくる萃はまさに人魚のイメージだ。人魚は魔物である。その美しさで男を海に引きずり込み溺死させたりといった命取りの誘惑をする。女性の性的魅力を強く持ちながら、その形故に性の欲求を満たすことはできない。それに伴つて母になること、妊娠ことも不可能であり、母性の否定を表しているともとれる。その意味で、人魚は処女神でもある。

処女神の一つの特徴である、

自分にまつわる悪い影響に一番気付きにくいために、自分の自由意志で「タブー」の規制を守ろうとする見込みがない。

『女性の神秘 月の神話と女性原理』

M・エスター・ハーディン著中)

というのは、好きであれば父親とも弟とも恋をしてしまふ萃の氣質を表している。

それが、終末になるにつれて萃の氣質と共に、彼女の人魚のイメージが崩れている。

私は生んでみず。

血液型は同じだから、ばれないと思う。つわりのゲロの方が、母に殴られるよりまだ甘いのが知つた。

乙彦の子供を身籠もった萃の決意である。産む性の否定という人魚のイメージが、ここでははっきりと捨て去られる。さらに、

子供を産んで乙彦と、(続ける) というのは無理でした。私にはそれが痛いほどわかっていました。

と、今まででなかった萃の「タブー」の意識が認められ、処女神の特質も否定される。

このような、彼女の性質の変換の原因と風美の存在とは深いつながりがあると考えられる。

第二節 萃と風美——二人の女性の視点について

風美は萃を語る語り手として設定されているが、前二作と比較してより客観的になっている。風美にとって「N・P」は恋人の死との関係はあっても、あくまで物語であり、しかも五年も前の過去の思い出の一つにすぎない。しかし、風美以外の人間、乙彦・咲そして特に萃にとって、「N・P」は自分の存在価値の証明であり、人生観を決定づけているものだ。何故ならば「N・P」に描かれているのは萃自身であり、唯一誰か、具体的には父親に、恋人としてしる愛されていたという証拠だからである。萃は「N・P」そのものといってもいい。しかし風美にとって彼らは「N・P」と共に過去の人物、物語の中の人達であり、言ってみれば彼女は、その物語の読者であり、記録者である。自らが直接物語に関わっていないところに今までの語る側の女性との相違があり、それ故に客観的視点

を保つことが可能である。これは第一章でも述べた通りである。

小説中において、風美は萃にとってどういう存在か。萃は「N・P」という近親相姦を題材にした美しい小説を心の糧にし、それを信じることで世間のモラルに縛られずに生き、弟との恋愛をも続行させていた。だが、そこに限界を感じていないわけではなかった。

私が生まれてから今まで、ずっと信じていた物語の要求は、私の死、だったんじゃないかと思います。

というように、自分の未来に死をおくことで、自らを納得させていたのだ。その人生観が、風美との出会いによって変わってくる。

私はずっと見ようとつとめていた奇妙な夢の狭い世界に、あの衝撃を伴ってあなたの存在が入り込んできたのです。

△中略▽

そしてあなたの姿かたち、私が何かを問いかけたことの答え、そんなことだけではなく、あなたの持つ色が目に映るいろいろなものに反映されるようになってきて、もしかして出口があるような気がしてきた。

出口とはいったい何であろうか。今までの萃の社会とは、内にあるもの、「N・P」によって作られた自分しかいない社会であったのではないか。それが風美という全くの他人の理解を得、外に自分の存在価値を認めた時、今までの生活を切り捨て、未来のある生きる道を見出すことができたのだ。言ってみれば風美は萃にとって母

性であった。

あなたをじつと観察していたら、そのぬけたところや、陽光さ、不器用さ、人の良さ、暗さ、仕草、よく見ていたら、何か自分のことも少し好きになれそうな気がしてきた。ほかの人々も。世界がそのままの姿で初めて自分の中になだれ込んできたような気がしました。愕然。

母性とは何だろうか。「世界がそのままの姿で初めて自分の中になだれ込んできたような気がしました。」とあるように、今まで萃は世界を拒み心のままに生きていた。

「何もないんだね。」

私は言った。この人は、住居に愛がないんだな、と思った。

見たとおりの、箱のようにしか思っていないんじゃないかな。

住居とは生活の場である。萃は生活感というものの、現実の重みのようなものからのがれていたのだ。母性とは、生活や現実や世間一般のモラルといった肉体の生活を教えてくれるものであり、自らを生かしながら何かを産み出す生の本能のようなものではないか。

青木やよひ著『母性とは何か』の中に

母性とは精神的に自立した人間が、自分の保護を求めているような小さなものや弱いものを受け入れようとするやさしさであり、同時に人間の社会化の媒体である。

という論があるが、風美は萃にとってまさしくそうであった。風美

は初めて性を越えて萃を受け入れ、命をかけて守ろうとしてくれた人間だったのだ。

でもそれと同時に何か体が中につよく脈打つのを感していた。必死なもの、静かな、子供のときから体の中にあつた疑問のようなもの、

△中略▽

夏、夏を、萃がいて、いつも揺れるようにそこにあつた空間の色、その命の向かうところを。

悼む気持ち。

「もったいない。」

と私ははつきり言ったと思う。あるいは口に出せなかったかもしれない。でも、萃の心のピントが合った。はっと目を見開いて、萃は私の思考のエネルギーを受け取つたような表情をした。

「もったいないかな。」

と言った。そして靴を脱いで私に駆け寄り、私に抱きついてキスした。

自殺を決意した萃が風美に薬をのませて別れを告げようとする場面である。体がマヒして動けるはずはないのに必死の精神力で起き上がり、萃の死をとめようとする風美の「思考のエネルギー」を感じ取つた萃は、その時「N・P」の呪縛から解放されたれ、死への逃避という概念を切り捨て「N・P」を乗り越えて、新たな生への方向を見つける覚悟をしたのである。

第三節 小説の中の小説について

恋愛については、まえに述べた「食」の問題と関係が深いが、さらに「近親相姦」を描くことや、「性愛」を描かないのはなぜかということも含めてそれらの関わりを考える。

まず、近代小説から現代小説に移行していくなかで文学における恋愛の意味も大きく変わって来た。近代小説において恋愛とは人生そのものを左右するような、ある重みを供えていた。

秋山駿は『恋愛の発見』の中で、

日本の近代文学は欧米の近代文学に出会って、「恋愛」というものを発見し、それと同時に「個」というものを発見した。これは二つとも、本当は同じようなものだといつてよい。つまり恋愛とは単に男と女がいて、セックスを根底にして愛し合うというようなものとは言えない。

といっている。

「家」や「社会」といった厳しい枠があった時代に、その枠を打ち破ろうとする内面の葛藤が、一種のタブーであった恋愛を通して描かれていた。それ故に恋愛は肉体よりも精神的なものに重心があったのだ。

とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ。

(『こころ』より)

漂泊でも好いわ。死ねとおっしゃれば死ぬわ。

(『それから』より)

特にこれら夏目漱石の代表作には、近代文学における恋愛が如実に表されている。

しかし、近代から現代に時代が変わっていくなかで、恋愛というものは本来の意味を失っていった。

恋愛を、我々があまり尊重しなくなった、確かなものとは思わなくなつた、もつと判然と手で触れることのできる根底がほしい。それが犯罪であり、性でありです。^(ママ)

(『恋愛の発見』より)

それまで人々をとり囲んでいた枠が崩れ、無数の選択肢が目の前に提示され、もはや恋愛もタブーではなくなつた。それどころか、姦通いわゆる不倫や同性愛までもひとつの恋愛の形として、社会の中に浸透していった。

タブーは恋愛の一つの条件だ。

恋愛はタブーを超えてしまうと、何か素晴らしいものが出現するといふふうにもいえるし、……………

(『国文学』3年1月号の増田みず子のことば)

いってみれば、タブーがあつて成立していた恋愛というものがこれが恋愛だという決定的な形を提示しにくくなつていったのだとい

えよう。

それゆえ、文学の中でも恋愛を描くというのが困難になり自然と恋愛Ⅱ性愛の図式が設定されたと考えることが出来る。

吉本ばななは、この恋愛というテーマを元の神聖なもの、極限の心の交流という域に戻そうとしているのではないか。「近親相姦」も「食」もそのために必要だったのだらう。

まず現代文学に定着してしまった恋愛Ⅱ性愛の図式を崩す必要がある。けれども性愛抜きに普通の関係の男女の恋愛を書こうとするところに無理が出てくる。そこで性愛を書かないで成立する男女の関係として「近親相姦」が設定されている。近親相姦は、あらゆるタブーが崩されていく中にあっても決して崩れることのない、いわば永遠のタブーである。また同時に、最も純粋な恋愛の形でもあるのだ。

ゾロアスター教では近親相姦は美德で、血も近ければ近いほうがいい。ある意味でそれは重要だ。アニメ、魂なんかのことを言えば、近親相姦における愛こそ、恋愛におけるいちばん素晴らしい形というものはありうるでしょうね。

『国文学』3年1月号の増田みず子氏のことば)

これと類似することを、古橋信孝氏が『吉本ばなな論』の中で指摘している。

血の繋がりは倫理を超えたものである。つまりことばによる説明を必要としないものなのである。

△中略▽

人と人との関係を話すというコミュニケーションをあまり信用せずに、心が通じることに重きを置いて書くとしたら、家族に行き着くのが最もわかりやすいだらう。恋人が親族である場合が理想的になるのは必然的だ。

かくして吉本ばななの小説は近親の恋愛をえがくことになる。それは古代の、つまり人類の起源の神話だ。

タブーという要素を持ち、なおかつ倫理を超えた精神の究極の恋愛であり、しかも性愛があえて必要ではないという条件の下に作者は近親相姦を描いているのではないかと考える。

次にここに「食」がどう関わってくるのかということである。

性愛を排除した恋愛関係において食は、二人の濃密な関係を表し得る唯一の手段として登場する。恋愛とまではいかないまでも、兄妹(姉弟)間の微妙な愛情の揺れの表現として、食事の場面はたびたび設定される。これは、吉本ばななに限らず、小川洋子の『完璧な病室』や村上春樹『ファミリー・アフエア』にも同じ意味での食が使われている。

「食」の持つイメージとはどんなものであろうか。たとえばアダムとイブの神話では、林檎を「食べる」という禁を侵してしまったために二人は神の国を追放されるが、結局そのことよって二人は子供を生み人間の世界が造られていく。「食べる」ことで、神に造り出されたという意味で兄妹だった二人の関係が、男女に変わったという解釈もできるわけである。また、アンドレ・モラナーダニス著の『性関係の歴史』という書のなかに

口は、同意、栄養摂取、及び《空想的な》作品においてそれが象徴する愛の器官である。

とある。ならば口を動かして食べるという行為は愛情の象徴であるといえるだろう。

これらのことから言っても食事が性愛の代用であると考えられるし、その上で作者は食の場面を書くのだろうか。

しかし、以上は『N・P』までのばなな作品の特徴だ。『N・P』では明らかにその特徴が変わってきた。近親相姦はやはり恋愛において社会的倫理的に正常な形ではない。そのことが、近親間の性愛、さらには妊娠を書くことよって表されている。そしてそれと平行して恋人同士の食事の場面がほとんど書かれていない。

小説の中の小説、『N・P』の中の「N・P」を、これまで見てきた流れの中でどう受けとめるべきかを考えると、「N・P」とは『キッチン』から『N・P』に至るまでの吉本ばななの小説のテーマであったと見ることができないのではないか。

『キッチン』では、少女が全くの孤独の中から自分の居場所を見つけようと模索し、他人との間に新たな家族を形成することで足場を築こうとする物語で、テーマとして食と愛情との関係に焦点をあてている。『哀しい予感』では、少女が今ある平和な家庭を愛しながらも別の場所に自分の居場所があるのではないかと感じ、幸福な家庭から出ていく物語である。テーマとして『キッチン』に続いて食と愛情との関係や、近親者との恋愛を描いている。また新しくは、二人の女性の視点を設定している。それが『N・P』では、食

と恋愛との関係というテーマが薄れ、二人の女性の視点とは何かという問題が重要視されている。そしてこの二つの視点というのは家族という集団の枠を越えたところに、真の家族の意味を持たせる試みのようにもとらえられる。『N・P』で吉本ばななは、萃が「N・P」を乗り越えたように、今までの自分の小説のテーマを乗り越えたとみなすことができる。けれども「N・P」がいくつかの問題点、影を残して次の展開を匂わせているように、吉本ばななの小説のテーマも、また新たな方向へ向かって進んでいくのではなからうか。

おわりに

ここで述べた論はまだまだ不十分な点が多く、この論では解決できていない問題もある。しかし、自分なりに一つの結論が出せたことを嬉しく思う、卒論で吉本ばななの研究をしたことで、作品への興味が深まった。これからは作品だけでなく、それについてだされている論文ももっと読んで、自分の考えを深めていきたい。

基本文献及び参考文献

- ・「キッチン」 吉本ばなな著 福武書店 一九八八年
- ・「哀しい予感」 吉本ばなな著 角川書店 一九八八年
- ・「N・P」 吉本ばなな著 角川書店 一九九〇年
- ・「食べる 豊かな飢えの時代」 大島渚他 平凡社カルチャーTODAY ② 平凡社 一九八〇年

- ・「女性の神秘 月の神話と女性原理」 ユング心理学選書 ⑧
M・エスター・ハーディング著 樋口和彦・武田憲道訳
創元社 一九八五年
- ・「母性とは何か 新しい知と科学の視点から」 青木やよひ編
金子書房 一九八六年
- ・「恋愛の発見 現代文学の原像」 秋山駿著 小沢書店
一九八七年
- ・「国文学 恋愛小説」 学燈社 一九九一年一月号
- ・「イメージシンボル事典」 ド・フリス、A著 山下主一郎訳
大修館書店 一九八四年
- ・「こゝろ」 夏目漱石著 角川文庫 一九五一年
- ・「それから」 夏目漱石著 新潮文庫 一九四八年

〔評〕

小説「N・P」は、吉本ばなのこれまでに出版された小説の集約されたものである。その作品ごとの主題の展開を、「食」と「近親相姦」と「恋愛」に焦点をあてて、眺めており、吉本ばなの小説の魅力と新しさを引き出すのに成功している。

(青木 美保)